

甲州天目山棲雲寺 蕎麦奉納

= 日本型華夷秩序の眼 II =

江戸ソバリエ認定委員長
ほしひかる

☆甲州天目山^{せいうん}棲雲寺

ここ甲州天目山棲雲寺に立つと、小金沢山(2014m)、牛奥ノ雁ヶ腹摺山(1994m)、黒岳(1988m)、大蔵高丸(1781m)、ハマイバ丸(1752m)の山々の向こうに富士が見える。



【天目山より富士を望む】



【天目山棲雲寺】

江戸ソバリエ神奈川の会はこの棲雲寺で毎年秋に蕎麦切奉納を行っている。私も縁があって参加させてもらっているが、平成27年から始めているから、もう何回、新宿駅 ⇄ 甲斐大和駅を特急「あずさ」や「かいじ」で往復したことだろう。そして甲斐大和駅からは、いつも神奈川江戸ソバリエの会の恩田様の車で天目山へ登っていく。



【甲斐大和駅】

この山は元は木賊山^{とくさ}とよばれていた。だから昔から木賊の群生する山だった。

ついでに言えば、都下から山梨・長野にかけては蕎麦界でお馴染みの^{おやま ぼくち}雄山火口も多く生えていたらしい。戦国時代、甲斐武田軍と越後上杉軍の鉄砲戦において火縄銃の火口として使われていたのだろうか。



【雄山火口】

それはさておき、この木賊山が天目山へと名が変わったのは、^{ごっかいほんじょう}業海本浄 禅師 (1284~1352)がこの山に天目山栖雲寺を開山してからである。業海は1318年に入元し、^{ちゅうほうみょうほん}杭州天目山(浙江省杭州)の普応国師 中峰明本 (1263~1323)の下で法統を嗣いだ。

わが国の禅僧は、南宋時代は^{きん}径山の^{ぶしゆん}無準師範 (?~1249)の下で、元の時代には中峰明本の下で修行する者が多かった。

業海が渡ったころの元朝は第11代皇帝であった。日本では鎌倉北条執権14代目高時のころだ。そして業海は1326年に帰国した。つまり北条執権15代貞顕のときで、北条政権が幕を閉じようとしているころであった。

また僧といっても、一様ではなく、主として教育家と宗教家に分かれるらしい。業海は修行に熱心で隠遁に徹した宗教家であった。だから一般には知られていなかった。よって業海という人物の詳細は伝えられていないが、日野四郎の『業海禅師』(山梨ふるさと文庫)を見ると彼の交流関係が見えてくる。すなわち、

1318年の入元は、^{みんそう}明叟齐哲 (?~1347)と^{こせん}古先印元 (1295~1374)と共に異国の地を踏んだ。そして1326年の帰国の際には、日本へ赴く元の僧の^{げん}清拙正澄 (1274~

1339)、それに^{むいん}無隠元晦 (?~1358)、^{ふくあん}復庵宗己 (1280~1358)、^{じゃくしつ}寂室元光 (1290~1367)、

^{せんがん}千岩元長 (元の僧)ら、さらに入元を共にした明叟齐哲と古先印元とともに波を枕に日本に戻ってきた。加えていえば、明叟齐哲、古先印元、無隠元晦、復庵宗己、千岩元長は共に中峰明本の下で修行を積んだ友だった。

ちなみに、帰国後に彼らが関係した寺院を整理してみると、次のようになる。

- *明叟齊哲：真如寺(京)・恵林寺(甲斐)・正法寺(甲斐)。
- *古先印元：恵林寺(甲斐)・等持寺(山城)・天竜寺・真如寺・萬寿寺(京)・浄智寺(鎌倉)・普応寺(須賀川)・長寿寺(鎌倉)・円覚寺(鎌倉)・建長寺(鎌倉)。
- *無隠元晦：顕孝寺(筑前)・聖福寺・建仁寺(京)・南禅寺。
- *復庵宗己：法雲寺(常陸)。
- *寂室元光：福巖寺(神戸)・往生院(近江)・東禅寺(美濃)・棲雲寺(甲州)・永源寺(東近江)。

業海は、とくに甲斐と縁のある明叟齊哲・古先印元・寂室元光と交流をもちながら、恩師中峰明本の教えを守って修行に徹し、やっと足利尊氏の代の1348年に甲州木賊山に天目山を開いた。彼が木賊山に開山したのは、当山が浙江省杭州市の天目山によく似ていたからだといわれている。筆者は杭州市の天目山を知らないが、実際に訪ねた現・青柳住職は、背筋に何か走るくらい日中の両山は似ていたとおっしゃるから、伝承は正しいようである。

ただ、業海が帰国後22年も経ってからの当山創建となったのは、鎌倉幕府滅亡から室町幕府樹立までの混乱期間にあったためだろうと筆者は想像する。

- 1318年 業海、入元
- 1326年 業海、帰国
- 1333年 鎌倉幕府滅亡
- 1338年 足利幕府樹立
- 1348年 業海、栖雲寺創建
- 1435年 京・相国寺で「蕎麦」が食されていた。(『蔭涼軒日録』)



【業海本浄和尚】



【普応国師中峰明本】

☆甲州天目山栖雲寺 第10回蕎麦奉納

令和6年10月9日(土)、江戸ソバリエ神奈川の会の石田紀雄氏と恩田智博氏、

江戸ソバリエ協会の筆者(ほしひかる)によって栖雲寺開山業海本浄像に蕎麦切が奉納され、また境内に祀られている蕎麦^{そば}禱^{とう}観音像にも蕎麦の種が供えられた。

蕎麦^{そば}禱^{とう}観音は全国でも珍しく、もともとは「双馬頭^{そうばとう}観音」とよばれる江戸中期の尊像だったが、蕎麦切発祥の地にあるためか、いつのころからか「蕎麦^{そば}禱^{とう}観音」と親しまれるようになった。お参りの仕方は、蕎麦の種を右手で一掴み取って「念^{ねん}彼^び観^{くわん}音^{いん}力^{りき}」と三回唱えながら右の皿に約半分を注ぎ、「念^{ねん}彼^び観^{くわん}音^{いん}力^{りき}」と三回唱えながら左の皿に残りを注ぎ、姿勢を正して観音様に合掌し、心の中で大願を禱り、合掌のまま一礼するという。



【蕎麦禱観音像】

その木賊山が天目山に変わったのは、業海^{ごっかい}本浄^{ほんじやう}禅師(1284~1352)がこの山に栖雲寺を開山してからである。なお、今回は業海本浄和尚の師である中国杭州天目山の普^{おん}応^き国師の七百年遠^{おん}諱^きが、鎌倉の大本山建長寺から吉田正道^{げいか}菅^{すけ}長^{ちやう}猊^に下^げをお迎えし、建長寺派僧侶約20名によって大々的に厳修された。



【楞嚴呪読経】

なかでも十数名の僧侶が本堂内を歩きながら読経する「楞嚴呪読経^{りょうごんしゅ}」は圧巻であった。

最後に全員で「中峰和尚座右の銘」を唱えて、大法要は終了した。

この日は、同時に重要文化財の普応国師座像、十字架捧持マニ像他栖雲寺宝物風入れ展や蕎麦振舞が行われ、多くの来山者で賑わった。

☆天野^{ただかげ}信景^{しお}著『随筆 鹽尻』

天目山栖雲寺は、尾張藩士で国学者の天野信景(1663~1733)著の『随筆 鹽尻』(以下『塩尻』)に「蕎麦切発祥の地」と書かれてから蕎麦界でも有名になった。

信景は35年を費やして『塩尻』(170巻余)をまとめ1733年に脱稿している。

その巻之十三宝永(1704~11)のなかに、「蕎麦切は甲州よりはじまる、初め天目山へ参詣多かりし時、所民参詣の諸人に食を売に米麦の少かりし故、そばをねりてはたことせし、其後うとむを学びて今のそば切とはなりしと信濃人のかたりし」としている。

世間では、蕎麦切発祥説として、この『塩尻』と『風俗文選』を持ち出して甲州か、信州かとセンセーショナルに騒ぎ立てた時期もあったが、『随筆 塩尻』は1733年脱稿したものの、江戸期には未刊である。したがって、この説は江戸時代には知られていない。よって論争は維新以降の、日清日露戦争に勝利したころからと筆者は推定している。

それに国学者の天野信景は第一級の知識人でありながら、「信濃人のかたりし」ことだけで、蕎麦切は甲州よりはじまる」と断じた点について、ソバリエとしては苦笑せざるを得ない。

それにしても、なぜ第一級の知識人がそのようなことを述べたのだろうか。

そこで筆者は「信濃人」というのに、多少引っかけた。もしかしたら信景は『風俗文選』の「蕎麦切ノ頌」を読み、根拠なき信州本山発祥説を目にして、故意に信州人が語ったとして甲州説を立てたのだろうかと思いたくなった。そうなるともう「随筆」ではなく、やや「滑稽本」の傾向である。

なぜ、そのようなことが起きたのだろうか。

それは、第一に蕎麦切の由来が明確でなかったからである。要するに蕎麦切の発祥について誰も知らないわけである。そこへ時代状況が加わる。

「時代状況」とは、どういうことかという、歴史には、国の力が絶頂期を迎えるときがある。そうすると国民は自信をもち始める。たとえば、絶好調の江戸後期の日本では、にわかに日本型華夷秩序というものが頭をもたげてきた。

基本的には日本人は外国を崇拜し、外国に憧れるタイプである。古くは唐、幕末から明治は欧州、戦後はアメリカにである。その反動のせいなのか短期間だが、たまに徒花のように自信を持ち始める時期がきて、「ジャパン アズ ナンバーワン」を言い出す。江戸時代は文化文政期、明治以降は日清日露戦争に勝利したころ、そして戦後のハブル期である。

そうした風の下、蕎麦界では蕎麦切日本誕生説が飛び出した。

筆者らが、ソバリエ認定事業を始めたころは、常識のように蕎麦切発祥は甲州か、信州かの論が言われていた。

それが静かになったのは、たぶん京都大学名誉教授大西近江先生が、栽培蕎麦の始源地は中国南部だと発表されてからであろう(2018年『ヒマラヤ学誌』)。もちろん栽培蕎麦と蕎麦切は違うものだが、世間も何となく蕎麦切日本発祥説に違和感をもちはじめ、現在はほとんど言われなくなったのである。

しかしである。ここからは筆者の思いである。

江戸ソバリエ認定講座では、わが国で本格的に粉文化、麵文化が始まったのは円爾聖一国師が、南宋から帰国する際(1241年)に水車・挽臼ならびに麵食文化を持ち帰ってからであるとしている。現に円爾帰国後から、日本でも**東大阪市で国産の挽臼**の製造が始まり、室町時代になると京の寺社では麵類が食されるようになった。**蕎麦についても1435年の史料『蔭涼軒日禄』**に見えるところから、寺社で食されていたことはまちがいない。これが後世にいう「寺方蕎麦」の世界であって、蕎麦も含む日本麵類の正史である。

一方、山口県鹿野町に古刹がある。開山は1374年、**用堂明機**が入元して径山寺で修行したゆえに径山寺の末寺とし、「唐の漢陽寺」と呼ばれていたという。そこには**唐伝来最古の茶臼**を蔵しており、**鹿野蕎麦**も先ごろまで栽培されていた。

また、当棲雲寺は中国由来の**天目茶碗**や**十字架捧持マニ像**などを蔵してしるし、**業海本浄は明叟齐哲・古先印元・寂室元光**ら**元留学僧**と親しくしていた。

彼ら元留学僧たちの寺院では、中国語が飛び交い、杭州での修行がわが国でも続けられ、そして中国由来の蕎麦が振舞われたらうことは十分想像できる。ただ業海は隠遁に徹した修行僧であった。なかなかそうした事実が見えそうで、見えてこない。

だからこそ、栖雲寺の慣習に関心をもった天野信景は、本山説に疑問をもってわざと「信濃人のかたりし」という文言をぶつけたのではないかと想像する。

案ずるに、わが国は円爾聖一国師によって本格的な粉食・麵食時代が始まったことが正史であるがゆえに、文化伝来にも支道があることは否定しない。

よって、栖雲寺や、漢陽寺なども蕎麦麵文化伝来の一端を担ったであろうと考える。

こうした思惑をもちながら、天目山栖雲寺の境内にある「**蕎麦切発祥の地**」の**説明板**が立てられるとき、筆者はその原案を書かせていただいた次第である。



【蕎麦切発祥の碑(甲州鞍馬石)】

【説明版】